

学 位 論 文 要 旨

氏 名 中原 久志

題 目 技術科教育におけるものづくり活動時の生徒の感情状況の分析に
基づく情意的支援の在り方の検討

本研究の目的は、中学校技術・家庭科技術分野（以下、技術科）のものづくり活動における生徒の感情状況に即した情意的支援の在り方を検討することである。

本論文は、緒論と結論を含め全7章で構成されている。第1章では、本研究の目的を踏まえ、技術科の授業におけるものづくり活動の位置づけや情意的支援の必要性、技術科の授業において生徒の情意に着目した先行研究を整理した。その上で、1) 生徒の内観に基づく感情状況の把握、2) 生徒の日常生活におけるストレス反応（以下、日常ストレス反応）と授業における感情状況との関連性の検討、3) 感情状況の把握に基づく情意的支援の方策の検討の3点を研究課題として設定した（以下、研究課題1～3）。これらの研究課題に対し本研究では、第2章から第6章において以下のように対応した。

まず、研究課題1に対しては第2章において、技術科のものづくり活動時の生徒の感情状況について、「癒し」をキーワードに生徒が感じるポジティブな感情（以下、「癒し」）、「ストレス」をキーワードに生徒が感じるネガティブな感情（以下、「ストレス」）の実態把握を行った。その結果、技術科のものづくり活動全体に対して「癒し」を感じている生徒は38.8%、「ストレス」を感じている生徒は36.5%であった。また、得られた自由記述を分類・整理したところ、生徒は技術科の4内容の中でも、内容A「材料と加工に関する技術」（以下、材料加工学習）のものづくり活動と結び付けて「癒し」「ストレス」の感情状況を得やすいことが明らかとなった。また、「癒し」に関するポジティブ感情として「つくる楽しみ」や「完成の喜び」など9カテゴリ、「ストレス」に関するネガティブ感情として「失敗に対する後悔」や「不満感・イラだち」など8カテゴリの分析フレームワークが得られた。そこで以下の検討においては、学習場面として材料加工学習に焦点を当てるとともに、作成した分析フレームワークを用いて生徒の感情状況に影響する他の要因との関連性について検討を進めた。

第3章及び第4章においては研究課題2に対処するために、生徒の日常ストレス反応と材料加工学習のものづくり活動において生徒が感じる「癒し」及び「ストレス」との関連性を検討した。その結果、第3章では、日常ストレス反応と材料加工学習のものづくり活動における「癒し」との間には有意な関連性が認められ、「不安」、「抑うつ」、

「怒り・攻撃」反応の強い生徒は「没頭・無心」を感じやすく、「ひきこもり」反応の強い生徒は「達成の期待感」を感じにくい「完成の喜び」を感じやすいことが明らかとなった。また、第4章では、ものづくり活動における「ストレス」と日常ストレス反応との関連性には性別による差異が生じていることが示唆された。男子では両者に有意な関連性は認められなかったのに対し、女子では「怒り・攻撃」反応と「失敗に対する後悔」、「絶望」反応及び「抑うつ」反応と「作業不安・困難感」との間にそれぞれ有意な関連性が認められた。

研究課題3に対しては第5章において、材料加工学習のものづくり活動における生徒の感情状況を簡便に把握できる測定尺度を構成するとともに、授業における学習意欲との関連性を検討した。その結果、材料加工学習のものづくり活動で生徒が感じる「癒し」は1因子構造であることが確認された。一方、「ストレス」は、ものづくり活動のプロセスで生じた事象に起因する「プロセス由来ストレス」因子、ものづくり活動そのものに対するネガティブな評価や無気力さに起因する「アパシー由来ストレス」因子の2因子からなることが明らかとなった。これらの3因子と授業における学習意欲との関連性を検討したところ、ものづくり活動に「癒し」を強く感じる生徒ほど、学習意欲が高い傾向が示された。また、ものづくり活動における「ストレス」と学習意欲との関連性では、性別によって異なる傾向が示された。男子では「失敗に対する後悔」、「作業不安・困難感」などの「プロセス由来ストレス」が成就感や達成感への期待に基づく学習意欲を高める要因となりうることが示唆された。これに対して女子では、「アパシー由来ストレス」が学習意欲を低減させる要因となりうることが示唆された。

第6章ではさらに、材料加工学習のものづくり活動における生徒の感情状況と授業内の学習経験との関連性について実践的に検討した。その結果、「成功経験」、「工夫経験」、「満足感経験」、「有用感経験」がものづくり活動における「癒し」を促進する上で重要な役割を果たしていることが示唆された。また、「成功経験」が「プロセス由来ストレス」を低減しうるとともに、「成功経験」と「有用感経験」が「アパシー由来ストレス」を低減しうることが示唆された。しかし、「困難感経験」や「作業被援助経験」、「失敗経験」は、逆に「プロセス由来ストレス」を高める危険性のあることが示唆された。

以上の各章で得られた知見に基づき第7章では、技術科の材料加工学習における教育実践への示唆として、①ものづくり活動に際して生徒の日常ストレス反応を適切に把握しておく必要性、②生徒の感情状況のモニタリングに即した学習意欲を喚起する手立て、③生徒の性別や意識の差異に着目した情意的支援の適切な使い分け、の3点について考察し、教科指導と生徒指導を両輪の輪とする授業実践に向けた今後の課題を展望した。